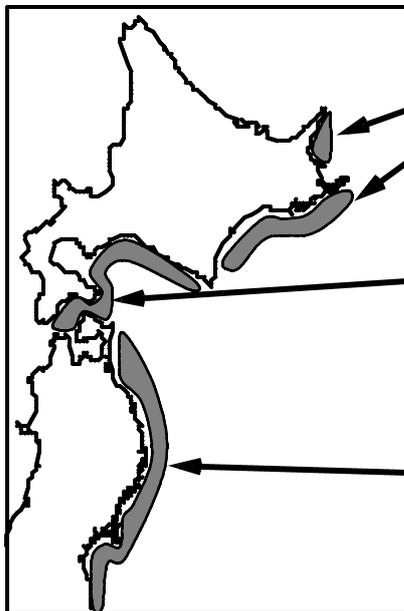


平成19年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年7月～9月)

常磐～北海道東部までの北部太平洋海域におけるスルメイカの来遊水準は2006年を上回る



- ・北海道東部～根室海峡周辺海域：
来遊量は2006年を大きく上回る
魚体は16～22cmが主体
- ・津軽海峡～北海道南部海域：
来遊量は2006年を大きく上回る
魚体は20～24cmが主体
- ・常磐～三陸海域：
来遊量は2006年を上回る
魚体は18～22cmが主体

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、田中、佐藤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp>

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場 北海道立函館水産試験場	三重県科学技術振興センター 水産研究部
青森県水産総合研究センター	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産研究開発センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 中央水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	

平成19年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2007年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～北海道南部海域、
北海道東部～根室海峡周辺海域

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2007年級群）。

魚体の大きさは外套背長で表示。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

（1）来遊量：常磐～三陸南部海域は2006年並みかやや上回る。

三陸北部海域は2006年を上回る。

（2）漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。

（3）魚体：2006年よりも小型であり、8月は18～22cmが主体。

2. 津軽海峡～北海道南部海域（いか釣り、定置網）

（1）来遊量：津軽海峡内は2006年並みかやや上回る。

津軽海峡東口～北海道南部海域は2006年を大きく上回る。

（2）漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。

（3）魚体：2006年よりも大型であり、8月は20～24cmが主体。

3. 北海道東部～根室海峡周辺海域（いか釣り、定置網）

（1）来遊量：2006年を大きく上回る。

（2）漁期・漁場：北海道東部海域の漁場形成は2006年より早まる。

根室海峡周辺海域の漁場形成は10月以降になる。

（3）魚体：2006年よりも小型であり、8月は16～22cmが主体。

漁況の経過（2007年4月～6月）および今後の見通しについての説明

（1）資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群を主体にし、それに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増

加に転じ、近年では1996年（漁獲量：276,249トン）が最も資源水準の高い年となった。増加に転じた1989年以降では、資源水準が大きく変動した期間も見られたが、2000年以降はおおむね中位水準で推移していたと考えられる。なお、2006年7～9月の常磐以北太平洋海域の漁獲量（生鮮）は33,906トンであり、2005年同期（51,837トン）を大きく下回った。

（2）関連調査結果

A：第1次漁場一斉調査

6月中旬～7月上旬に実施された第1次漁場一斉調査（釣り）の結果、沿岸域（38°N以北、144°E以西）の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は3.2であり、2006年（0.3）を大きく上回った。一方、沖合域（38°～42°N、144°～154°E）では0.4であり、2006年（0.4）並みであった。全水域では1.6となり、2006年（0.4）を大きく上回り、2002年以降の平均（0.8）の199%の水準に達した。CPUEが10を越える地点は津軽海峡周辺海域と北海道日高沿岸で認められ、これら沿岸域に高密度で分布すると推測された。一方、沖合域ではほぼ全域でCPUEは低い水準であった。

B：その他関連調査

- ・ **新規加入量調査結果**：5月上旬～下旬に常磐～三陸沖合域で実施された表層トロールネットを用いた漁獲試験の結果、外套背長5～7cmのスルメイカの平均採集尾数（1曳網当たり漁獲尾数）は27.6尾であり、2006年（33.9尾）をやや下回った。一方、外套背長8cm以上の大型個体の平均採集尾数は5.6尾であり、2005年（5.0尾）をやや上回った。2007年では2006年のように高密度に集中して分布する海域は見られなかったが、東経147～162度付近まで広く採集されており、2006年よりも沖合域に拡散している傾向が見られた。
- ・ **日本海における一斉調査結果**：日本海で6月下旬～7月上旬に実施された一斉調査において、津軽海峡西口周辺海域（39°～42°N、138°～140°E）における平均CPUEは11.9であり、2006年（15.4）を下回った。
- ・ **岩手県沿岸域における漁獲試験結果**：6月上旬～7月上旬に岩手県沿岸域で実施されたいか釣り調査によると、2007年の平均CPUEは5.8であり、2006年（0.6）を大きく上回った。

（3）2007年の各海域の漁況経過（主に5月～6月）

- ・ **本州南方・四国海域**：高知県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（22トン）は2006年（18トン）を上回った。和歌山県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（14トン）は、2006年（14トン）並みであったが、CPUEは前年比198%に増加した。三重県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（32トン）は、2006年（130トン）を大きく下回り、CPUEも前年比43%に減少した。一方、中型まき網による5～6月の漁獲量（71トン）は2006年（53トン）を上回っていた。静岡県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（8トン）は、2006年（12トン）をやや下回ったが、CPUEは前年並みであった。神奈川県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（0.2トン）は、2006年（0.1トン）並みであった。また、定置網による5～6月の漁獲量（0.8トン）も、2006年（1.5トン）並みであった。
- ・ **房総・常磐南部海域**：千葉県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（0.1トン）は、2006年（0トン）並みの低水準であった。しかし、定置網による5～6月の漁獲量（12.0トン）は、2006年（5.4トン）を上回った。茨城県沿岸での底曳網による4～6月の漁獲量（8.6トン）は、2006年（2.2トン）を上回り、CPUEも前年比294%に増加した。
- ・ **常磐北部・三陸海域**：福島県沿岸での底曳網による6月の漁獲量（32トン）は、2006年（41トン）を下回った。また、CPUEも前年比61%に減少した。宮城県沿岸での底曳網による6月の漁獲量（576トン）は2006年（256トン）を大きく上回り、CPUEも前年比457%に増加した。しかし、釣りによる漁獲量（6トン）は、2006年（90トン）を大きく下回り、CPUEも前年比26%に大きく減少した。岩手県沿岸での釣りによる6月の漁獲量（43トン）は、2006年（37トン）を上回り、CPUEも前年比116%に増加した。一方、定置網による漁獲量（463トン）は、2006年（662トン）を下回った。青森県沿岸では、八戸および白糠沿岸の釣りによる6月の漁獲量（222トン、463トン）が、ともに2006年（0トン、0.8トン）を大きく上回った。同様に、CPUEもそれぞれ前年を大きく上回っていた。
- ・ **津軽海峡・北海道南部海域**：青森県大畑沿岸での釣りによる6月の漁獲量（56トン）は、2006年（0.5トン）を大きく上回った。CPUEも前年比130%に増加した。道南函館港での釣りによる漁獲量（219トン）は、2006年（200トン）並みの水準であったが、CPUEは前年比82%に減少した。
- ・ **道東海域**：道東近海での釣りの初漁は7月12日の段階でまだである（2006年は8月17日）。しかし、北海道東部釧路町昆布森周辺の定置網にスルメイカが入網し始めた。

(4) 魚体の大きさ

- ・5月の新規加入量調査（表層トロール）で漁獲されたスルメイカの全調査地点での外套背長組成は、モードが3cmにある単峰型の組成であった。2006年と比較すると、モードは同じであったが、外套背長5cm以上の大型個体の比率は高くなっていた。
- ・6月の漁場一斉調査（いか釣り）で漁獲されたスルメイカの全調査地点の外套長組成は、モードが17cmにある単峰型の組成であり、2006年よりモードで1cm大型であった。海域別では、三陸近海域がモード15～16cm（2006年：18cmと20cm）、津軽海峡周辺海域がモード17cm（2006年：15cm）、沖合域がモード14cmと17cm（2006年：16cm）であった。
- ・宮城県沿岸で6月中旬～下旬に底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは18～24cmであり、2006年並みであった。岩手県沿岸で6月に定置網で漁獲されたスルメイカのモードは13～16cmであり、2006年より2～3cm小型であった。青森県太平洋沿岸で6月に漁獲されたスルメイカは25～40尾入れが主体であり、バラ入れが主体であった2006年よりも大型であった。

(5) 今後の見通しの説明

- ・漁場一斉調査結果および本年6月までの各地の漁獲状況から判断すると、7月上旬現在で、太平洋の各海域に来遊しているスルメイカ冬季発生系群は、一部の海域で漁獲の低迷が見られものの、おおむね2006年を上回る水準であると推測される。また、漁期中盤以降に加入すると考えられる後続群の豊度は、5月上旬～下旬に実施した新規加入量調査における外套背長5cm以上の幼体の漁獲が2006年並みであったことから、前年並みの水準はあると予測される。以上のことから、本予測期間である7～9月にかけての来遊水準は2006年を上回り、漁場一斉調査平均CPUEの比較から、2004年並みの水準になると予測される。
- ・常磐～三陸沿岸域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群が主体であり、これに津軽海峡から加入する日本海由来の群れが加わると推定されている。三陸近海および津軽海峡周辺海域における漁獲情報と調査結果から、三陸周辺海域に来遊するスルメイカの資源水準は2006年を上回ると推測される。しかし、常磐～三陸南部周辺海域の漁況は、漁業種類によっては好不漁が分かれており、一概に昨年を上回る状況にはなっていない。そのため、三陸南部以南海域に関しては三陸北部海域よりも来遊水準は低いと予測される。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年よりも2～3cm程度小型の個体が主体になると考えられる。

- ・ 津軽海峡～道南海域での漁獲対象資源は、津軽海峡から加入する日本海由来の群と太平洋を北上する群である。漁獲情報と太平洋で実施された一斉調査結果から、津軽海峡東口周辺海域の資源水準は2006年を大きく上回ると推測される。一方、津軽海峡西口周辺海域での調査船によるCPUEが2006年を下回ったことから、津軽海峡内の来遊水準は、漁期後半には前年を下回る可能性がある。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年よりも1～3cm程度大型の個体が主体になると考えられる。
- ・ 道東～根室海峡周辺海域に来遊するスルメイカは、太平洋沖合を北上する群と考えられている。沖合域における一斉調査の結果から、太平洋沖合域に分布するスルメイカの資源水準は2006年並みかやや上回ると推定される。しかし、本年は道東沖合域の北上暖水の張り出しが強いため、道東沿岸域への北上回遊が前年よりも早まると推測される。これらのことから、7～9月における来遊水準は2006年を上回ると予測される。また魚体は、沖合域の漁場一斉調査結果から、前年より1～3cm程度、小型の個体の割合が増加すると推測される。

本邦北部太平洋でのスルメイカ漁獲量（7～9月）
（いか釣り・定置網・底曳網・まき網、生鮮、ト）

年	常磐・三陸	津軽海峡・道南	道東・根室海峡	合計
1993	16,241	20,196	2,612	39,049
1994	24,646	20,348	5,064	50,058
1995	34,334	14,941	3,463	52,738
1996	79,062	30,662	11,441	121,165
1997	28,417	35,509	3,262	67,188
1998	9,849	8,988	2,550	21,387
1999	23,714	10,864	836	35,414
2000	37,481	11,845	7,430	56,755
2001	23,948	15,519	5,631	45,099
2002	35,893	12,587	1,122	49,602
2003	31,316	18,476	2,517	52,309
2004	39,105	15,152	3,843	58,100
2005	29,233	17,962	4,642	51,837
2006	13,241	20,005	660	33,906